

# 3分暇つぶし2話 香港篇

simazake

## ブンブン丸

---

昔、香港に住んでいた頃、僕が頑張らなければいけなかったことは、おしっこの我慢だった。おしっこを我慢しなければ、日本男子の沽券（コケン）に関わるのである。

香港の人は、おしっこが非常に長い。

しかも、最後まで勢いがある、実に男らしい人が多い。

そこには残尿感は微塵も無く、爽快感が漂う。

「いい仕事したぜっ！」

というスガスガしさである。

男の中の男になると後半はあまりのスガスガしさに、ホースをブンブン振り回す。

「今日はオレラのライブに来てくれてありがとうっ！ それじゃ最後の歌をイクゼーっ！！」

という感じでボーカルが振り回す、マイクスタンドのように振り回す。

香港の小使用の便器には、壁から水が出ているだけで敷居のない便器がある。

ここにブンブン丸と相席してしまうと、大変な事になる。

彼のホースパフォーマンスが始まると、僕のズボンや靴にもひっかかりそうなのだ。

僕は小便が短い。

すぐ終わってしまう。

デートなんかで女性と同時にトイレに行くと、あまりに早く先に戻って退屈してしまって、

「この時間ほど無駄な人生の使い方はない」

と自責の念にかられる。

しょうがないからこういう時は、

「僕の小便が短いのではない。あの子はウ○コなのだ」

と思うことにしている。

そんなおり、真冬なのにクーラーのガンガン効いた部屋で打合せが長引き、なかなかトイレに行けないという事があった。

僕はかなり早い段階でトイレに行きたくなっていたのだけど、議論は白熱し、なかなかタイミングがつかめない。

しかも、会議を早く終わらせたいあまりに脳が活発化していいアイデアが出てしまう。

悪循環の泥沼にハマってしまった僕は、膀胱がかすかに震え始めているのを感じながら、それでもナイスアイデアを出してしまう。

そして4時間くらいの会議が終わった後、もらさないように千鳥足でソーっとトイレに行った。

ギリギリでやっとたどり着いた便器に放尿する時の感動といたら！

僕の求めていた、男らしいションベンがそこにあったのだ！

アレなら、振り回したい気持ちも分かる。

人に見せたい気もする。

残念ながら、その時トイレには他に誰もいなかったのだけど、「おらーっ！日本人だってこれくらい出来るんだぞーっ！！」と、香港人を威嚇したかった。

小便を我慢する＝男らしい＝気持ちがいいという事実を体感してからというもの、小便を我慢するようになった。

この快感を一人でも多くの人に伝え、世界で戦える男子を育成したいと思うようになった。

しかし、一つ注意すべき我慢してはアブナイ状況がある。

もし、布教活動がうまく行って日本中の男子が小便を我慢するようになった時のために、この事をきちんと抑えて置かなければならない。

それは、飲み会。

つまり酒を飲んだ時。

大量のビールを飲んだ時だ。

アルコールは判断能力を低下させ、本能を解き放つ働きがある。

本能が解き放たれ判断能力が低下すると、トイレに行くタイミングというのが分からなくなる。野生に近くなるわけだから、その辺の廊下とか柱とかがトイレのような気がしてくる。

いや、ここは俺のナワバリだ。

誰にも渡さないぞっ！

と思うようになる。

ナワバリを守るためには、文明社会ではやってはいけない事をしてしまうので、こういう場所では我慢してはいけない。

というか、体に悪いので良い子は我慢してはいけない。

## 気の弱い国民は、階段を使え!

---

香港のエレベーターで気づいたこと。

香港には地震がない。  
地震がないので、かなり高い建物をたてる事ができる。

建物が高いとエレベーターが進化する。  
なるべく早く人を運ばなければならない。  
ビルの高層化にともなって、エレベーターのスピードはあがる。

僕が香港に住み始めた頃には、すでにエレベーターは想像絶する速さに達していた。  
そしてそこに乗る人も。

香港のビルディングは高いだけではない。  
一つの階が広い。  
つまり、一度にエレベーターに乗る人数が多いのだ。  
僕の勤める会社が入っていたビルは、50階建てだった。  
1-15階  
16階-25階  
26-35階  
35階-50階  
という感じで、エレベーターが分けられてある。  
一つの区間にエレベーターが4つ用意されている。  
にもかかわらず、毎朝長蛇の列。

僕は24階が職場で、24階で降りる必要がある。  
16階-25階に行くエレベーターに乗らなければならない。  
朝の行列をやりすごす、飛び乗るエレベーターには日本人が僕一人。

一度にどれくらいの間が乗れるのか数えると20人くらいだった。  
20人の内訳は、香港人16名、ユーロッパのどこかの人2名、インド人1名、日本人1名という感じ。  
何も知らずにこういうエレベーターに乗ると大変なことになる。

建物の力関係は、上に住む人ほどエライという暗黙の了解がある。  
24階は全体では真ん中くらいだが、16階-25階の中という区間の中では24階はエライ。  
僕はこのエレベーターの中では、かなりエライ人物という事になる。  
当然、その他の人たちは下々という事になる。

エレベーターが動き出すと、かなりのスピードで上昇する。  
耳がツーンとしたかと思うと、2Gくらいの感覚が襲い、血圧が下がり、頭痛がしはじめる。  
大げさだが、そのくらいのスピードでエレベーターは動く。  
朝は、短時間で何百人もの人間を上空に運ぶのがエレベーターの役目だから、このスピードは納得できる。  
慣れてくると、もっと早くなればいいのと思うから恐ろしい。

さて、16階についた。  
1階で僕はエレベーターにギリギリ飛び乗る格好になったので、ドア側にポジションしていた。  
16階についてドアが開くので、僕は一度降りる事にした。  
奥の方から、強引に出ようとする女性がある。  
周囲の人も僕のように降りてやればいいのに、絶対に降りない。

香港は、競争社会だ。  
それも世界屈指の競争社会。  
勝つか負けるかだけの格差社会。  
あいまいなポジションで温い思いをしようとしている奴らは、すぐさま蹴落とされる。  
人を出し抜いてでも、自分の身を守らなければならない。  
他人に自分のポジションを奪われたら、下降しかないのだ。

そういう社会なので、エレベーターと云えども他人の為に身を動かすという事はない。  
お人好しの僕は、強引に抜けだした彼女に感謝される事もない。

啞然としていると、エレベーターのドアが閉まり出す。  
繰り返すようだが、このエレベーターは恐ろしい速さで人を運ばなければならない。  
人が降りる時間も最小限で計算されている。  
フロアについてドアが開いてから閉じるまで、3秒しかない。  
日本なら誰かが「開」ボタンを押してくれているものだが、香港では「閉」ボタンの連打だ。  
降りた僕が悪いのだ。  
自分で何とかしなければならない。  
素早く手を挟んで、ドアをもう一度開き、体を滑り込ませるのだ。  
露骨に嫌な顔をされるが、生き抜く為にはキツイ視線にもなれないといけない。

これを20階あたりまで繰り返す。  
16人の香港人の殆どが、20階の住人だったのだ。  
20階に辿りつくまでには、僕もキツイ視線になれる人間的成長もする事になる。

毎朝これを繰り返すうちに、僕自身も「閉」を連打するようになり、優しそうな顔の日本人からは金を騙しとってやろうかというハングリーさが身につく。

僕は香港が卑しいと言っているのではない。  
日本人は脳天気だと思うのだ。  
僕らから見るとハングリーに見える彼らの生活も、香港では当たり前だし、彼らは中国人の方がハングリーだというのだ。  
平和ボケを感じるなら、香港の高層ビルのエレベーターになるといい。  
無事に最上階までただり着けたら、ボケも吹っ飛ぶだろう。